

# 霧雨魔理沙の来たる森

ドリズリング・アズライト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

東方Project第二の主人公たる普通の魔法使い、霧雨魔理沙がフリーホラーゲーム『霧雨の降る森』の世界にお邪魔するお話。

# 目次

零話『現代入り』	1
一話『阿座河村へ』	10
二話『資料館・表』	22
三話『資料館・裏』	32
四話『資料館』	39
五話『管理人』	45
『閑話休題』	53



## 零話『現代入り』

「ねえ、魔理沙。貴女外に興味無い？」

「は？」

　　齡16の乙女が発するにはあまりにも似合わない声で、魔理沙と呼ばれた金色の髪を持つ少女は答えた。魔理沙は赤い巫女服を着た親友に向かって首を傾げた。

「だから、外よ、外。あるでしょ？」

　　外というのは、今彼女たちがいる空間のことではない。これを説明するには、この世界がどういったものかを先に説明する必要があるだろう。

　　まず、外に対する『内』は、彼女たちが暮らす空間『幻想郷』を指す。幻想郷には、現代に生きる人間には想像もつかないほど、未知の生物が住み、倫理が異なり、そして常識が違う。

　　そして内に対する『外』とは、彼女たちの生きる場所とはまた一線を画す世界。言わば、現代日本である。

「なんで急にそんな事聞くんだよ。…まあ、興味が無い訳じゃないけどさあ。でもお前

は『博麗の巫女』だろ、霊夢？」

霊夢と呼ばれた少女は頬を掻きながら苦笑いを浮べて目を逸らす。魔理沙には、それが霊夢の『癖』であり、同時に『言い難いことがある』と告白しているように覚えている。

「結界守で完璧主義のお前が、一体何を隠してるんだよ。言ってみな？」

魔理沙がそう霊夢に言うのと、霊夢はとても歯がゆそうに彼女に伝えた。つまりはこういう事である。

外へ行ってもらいたい、と。

「紫が言ったのか、それを？……つくならもう少しまともな嘘をつけよ。私でももちっとウマイ言い訳考えるぜ。例えば外から連れてきて欲しい奴がいる！とかさあ」

「それよ」

魔理沙は、凶らずしも霊夢が『紫』という人物から預かった伝言の理由を当ててしまったようだった。が、霊夢の言った『それ』の内訳が分からず、素っ頓狂な声を上げて聞き返した。

「……………ん？え？それって？」

「だから、それよ！連れてきて欲しいって人がいる、紫がそう言ってたの！私は知らないけど、魔理沙じゃなきゃどうにもならないとも言ってたのよ……………私じゃなく、魔理沙

でなきやダメらしいのよ。紫の考える事なんかわかんないけど、アレが言うなら間違いはないでしょ？」

霊夢がそう言う。「紫から預かったものだから、これ」と、魔理沙に大きな紙袋を押し付けて寝室に入ってしまった。魔理沙が困惑していると、閉まった寝室の襖が開く。「ソレ、服だつて。外に行くには魔理沙、貴女の服装は少しばかり目立ちすぎるらしい、から」

そう言い残して、霊夢は完全に寝室に入り切ってしまった。「オイ！ どういう事だよ霊夢！」魔理沙が大きな声を上げて寝室の襖に手をかけようとしたが、痺れる感覚と共に、襖から嫌悪感が漂ってくる。

「お前……襖に封印術なんか掛けたな……？」

「……………着替えて待つといて。迎えに行く。らしいわよ」

霊夢の伝言が終わると、襖の嫌悪感が更に増す。もう近づきたくなかった。

(ヤロウ……………いっちゃん強い術を掛けてる…もう何も聞き出せない、か。紫のやつ、何を考えてるんだ…?)

そう考えつつチラリと紙袋の中身を一瞥する。紫は魔理沙の考えが読めているとでも言うのか、中身は彼女の好きな白と黒のモノクロームなシャツ、ズボンだった。服の上にリボンが置かれており、それだけはモノクロカラーではなく、黒くもあり、同時に

何処か青くもある、そんなような不思議な色味をしていた。近い色だと、紺が一番似ている。

「……………まあ、いいか」

これ以上考えが及ばないからか、魔理沙は思考を放棄して自宅へと急いで戻っていた。神社から物音が消えると、閉じられた襖がするりと開き、霊夢がほうきにまたがって空を飛ぶ魔理沙の後ろ姿をじつと見据えていた。

「……………これで、良いのよね、紫？」

「……………そう、それでいいのよ霊夢。彼女じゃなきゃ成し得ない、これは彼女への頼みでもあるのよ」

霊夢の後ろの空間に妖しい光が差し、暗闇にぼつかりと穴が空いている。その中から声が聞こえてくるが、その中を覗くつもりにはなれなかった。無数の瞳がこちらを覗く異形の空間は、どうにも慣れないのだ。

「この際ハッキリしておきましょう。魔理沙に危険は？」

「外だから、それはあるでしょうね。暴漢に襲われたり、車両と衝突したり……………外は危ないもの」

「そういう事じゃない」霊夢が亜空間をキリリと睨みつける。すると、空間から一人の女性<sup>やくもゆかり</sup>が姿を現した。『八雲紫』だ。紫は口元に扇子を当てて隠しながら話す。



「勘が鋭いのね。危険は、確かにそれらだけではないわ。いえ、むしろそれらは鳴りを潜めると言ってもいい。真に危険なのは、あの森に隠された存在。忘れられず微かに存在する、妖怪とも人とも取れない未練」

「そんなのに魔理沙を宛がって良いわけ？」

「良くはない。でも、悪くもない。半々ね」

「じゃあ——」何故私でなく魔理沙なの。そう言いかけた霊夢を紫は制した。人差し指を唇に当てられたのだ。数尺はあろうかという距離を一瞬で詰めてのそれだ。だから紫の事は、好きだが苦手なのだ。先が読めない。

「お話は終わり。迎えに行つてくるわね」

そう言つて紫は空間の間に開いた『隙間』の中に消えていき、亜空間はその目を閉じた。暗がりには、もう何も残つていない。強いていえばそこに霊夢が寝るための布団が敷いてあるだけだ。

「……………まあ、良いけど。興冷めたわ」

誰もいない空間に悪態を着いて、霊夢は浅く長い眠りにつくことにした。



鬱蒼と茂る森の中、ポツンと立つ一軒家の中で金色の影が揺れ動いていた。「霧雨魔法店」と描かれた看板が指し示すとおり、そこは魔理沙の居城なのである。

「おお……紫のやつ、中々可愛い服を用意してくれたじゃないか。これは良いな」

衣服としては十分に機能する、典型的なズボンとワイシャツの組み合わせである。——魔理沙の感性が常人と少しズレている事を除けば、だが。少なくとも、社員が会社に着ていくようなシャツを、普通の女性は可愛いとは言わないだろう。だが魔理沙は言う。理由は単純、ズレているのだ。

「特にこの——紺のリボンが気に入った」

そう言って魔理沙は元つけていた白いリボンを外し、紺色のリボンに取り替える。金髪に紺のリボンがアクセントとなって、魔理沙の乙女(?)心をくすぐる。

「いひ、こりや良い」

鏡の前に立つと、純白のシャツとズボンを身に纏い、三つ編みにされた金色の髪とリボンが印象的な、魔理沙がして魔理沙とは思えない服装の少女が姿を見せた。

「似合ってるわよ」

「サンキュ、紫がこれをくれ……って、紫!?何しに……いや、わかってる。外なんだから

「？」

「ご明察。さあ行くわよ」

紫が魔理沙の手を引つ張ろうとするのを、何とか踏ん張ってこらえる。まだ聞きたいことがあるからだ。魔理沙にとっては死活問題だからだ。

「待って待って、待ってくれ！これは持つて行つても良いのか!?ダメなのか!?それだけ聞かせてくれ！」

魔理沙がそう言つて、ズボンのベルトに取り付けたポーチからひとつの箱を取り出す。

多大な魔力を感じられるその箱は『八卦炉』と言ひ、魔理沙が持つ魔法の力を増幅させるためのからくりだ。それを見て紫は、特に首を振ることは無かつた。

「持つて行つてもいいわよ」

「やった！じゃあ——」「ただし！」手放して喜ぼうとする魔理沙を牽制するように、紫が柄にもなく声を張り上げた。魔理沙は驚き、固まり、その言葉の末を静かに待つた。

「闇雲に魔法力を行使しないこと。これだけは絶対に守りなさい。最悪、死ぬから」

「……………」

魔理沙はそのまま沈黙を守つた。むやみやたらに反論しないのは、魔力なく魔法を行使する事がどれだけ命知らずで愚かな行為なのか、よく身に染みているからだ。

魔法使いとして中堅の実力者である魔理沙は、魔法がどれだけ不便で危険なものかよく知っている。魔力は、ただ休むだけでは補充されない。十分な環境で十分な休息を取り、体調でも精神面でも万全でなければならぬのだ。

言わば、精神を削って放つのが魔法である。そして、精神の亡くなった魔法使いはとうなるか。答えは単純、死ぬ。そして魔理沙は一度死にかけた事がある。見習いの時に、魔力を放出しすぎて昏倒状態に陥ったのだ。

だから、反論しない。よく肝に命じておくのだ。

「わかった」

魔理沙の魔法力が100としよう。彼女の必殺魔法たる『恋符「マスタースパーク」』の消費エネルギーは45である。残り10まで減ってしまうと、気絶する。0となると事実上の即死である。マスタースパークは威力と消費のセーブが可能であるから『恋符「ダブルスパーク」』のような技も撃てるが、外ではそのどれも撃つべきではない。

条件が達成できないのだ。先程挙げた条件は2つ。十分な環境で、十分な休息を取る。このうち休む場所は幾らでも確保できるだろう。だが環境となると簡単にはいかない。この環境というのが曲者で、空气中に魔力（妖怪にとっては妖力）が漂う程の濃密な環境を、外で確保するのは難しいのだ。

だから、魔理沙はこの八卦炉を触媒としては使わない事に決めた。——つまり……

簡易ライターやフラッシュライトのような、魔法を使わないものを除いて。

「準備は出来た？」 紫が魔理沙に聞いた。

「はい」

魔理沙はそれに頷いた。紫はその様子を見て微笑み、巨大なスキマを開いて魔理沙を飲み込んだ。魔理沙の意識が閉じ、次に聞こえるのは壮年の男が発する一声だった。

『《次は、〇〇駅。〇〇駅です。お降りの際は、足元にお気を付けください》』

## 一話『阿座河村へ』

『〇〇駅へ、〇〇駅です。お降りの際は、足元にお気を付けください』

殆ど誰も乗っていないような電車に、二人の女性が乗っている。一人は茶髪のセミロングヘア、黄色のTシャツを着てリボン付きカチューシャを身につけた、大学生の女性。もう一人は男性の切るようなズボンとワイシャツで、シャツの胸元を空けて袖を捲っている。

金髪の少女——名を霧雨魔理沙という——は、ふと手元を見ると、古びた切符が手に握られている事に気付いた。とどころが黒ずんで酷く劣化しているが、日付は恐らく今日この日であると直感した。駅名もここに書いてある通りだったので、ここが魔理沙の降りるべき駅らしい。

魔理沙がすくりと立ち上がると、もう一人の座っていた女性も立ち上がった。カチューシャと長めの髪が揺れ、汗に混じった洗剤の良い匂いが鼻を突いた。

(見たところ田舎らしいが……こんな田舎に何の用事なんだろう)

その女性をチラリと一瞥し、思考を巡らせる。観光で来たにしては、ここは少し寂れ

すぎている。かと言って里帰りという訳でも無さそうだ。割には荷物が少なすぎるからである。となると、墓参りが妥当な所か。魔理沙が推察していると、不意に話しかけられた。

「あの～……」

魔理沙がそちらを振り向くと、先程一瞥した女性が魔理沙に話しかけてきていた。無理するのもはばかられた魔理沙は、仕方なく返事する。

「………なんだぜ。私は今考え事をしている」

「あ、邪魔をしたなら謝ります、ごめんなさい」

そう言つてカチューシャの女性は頭を下げる。見ず知らずの他人に頭を下げられては少し申し訳がないので、頭をあげるように言うと、その通りに頭を上げ、女性は話を続けた。

「その、もしかしてこの駅で降りるんですか？」

「そう………だな。そうだけ、私はここで降りる事になつてる」

我ながら、『ことになつている』とは随分曖昧な答えだった。明確な問いに対して、まるで自分の意思で降りるわけではないかのような答えに、女性は首を傾げた。

「………突然聞いて、すみません。私はシオリって言います。お名前、聞いてもいいですか？」

シオリが魔理沙にそう聞いた。

「霧雨魔理沙。一応、魔ほ……普通の人だ」

危ない危ない、いつもの名乗り口上を外の世界でやってしまうところだった。

「まりさ……魔理沙さん、ですか。いいお名前ですね」

「魔理沙の方は気に入ってるんだ。ありがとう」

「魔理沙の方は……って、じゃあ霧雨の方は……？」

「何というか、嫌なんだ」曖昧な答えに、再度シオリは首を傾げた。

「私は親父から勘当された身でさ。私もあの家が嫌いだったから飛び出したって言うか。だから霧雨って名前はあんまり好きじゃない」

シオリが「そっか……」と、小さく呟く。

「でも、会えるうちに謝った方が良くと、私は思います」

「勝手な事言わないでくれよ。私も親父も、互いが互いを嫌いなんだぜ」魔理沙が口先を曲げながらシオリの言葉に答えると、シオリは言い難くもはつきりと魔理沙に返した。

「私は、親がないんです。もうありがとうの一言も言えない。だから、言えるうちに言っておいた方がいい。……と思います。…多分」

言葉が続けていくうちに尻込みしていつてしまうシオリに、魔理沙は思わず吹き出し



た。

「おいおい、あんたが言ったんだ、自信を持って最後まで言っておきなよ。……そうかな、私も少しぐらい顔見せてやろうかな」

シオリの意見を受けて考えを少し曲げる。シオリは明らかに嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「ああそれと」魔理沙は続けた。「私はまだ16だ。あんた見たところ、私よりみつつかよつつ、年上だ。私だけ砕き言葉を使うのもアレだし、あんたも丁寧言葉を辞めてくれると気楽なんだけど」

魔理沙の思惑を汲み取ったシオリは、頷いた。

「わかった、魔理沙ちゃん」

「ちゃん!?!……まあ、それも良いか」

魔理沙が突然のちゃん付けに困惑していると、汽車のドアが開いた。シオリが降りたので、魔理沙も降りる。

外はまだ明るく、無人駅を出ると辺り一面の緑が大地をおおっていた。線路沿いに手入れのされていない獣道が続いており、真ん中に草が生えるようにして二本、土が見えていることから、現地の人々に車道としても使われているようだった。

「ところで、魔理沙ちゃんは どうしてこの駅で降りたの? なにかやる事があるの?」

「私の？……人探しをしろって、紫から言われてる」

「ユカリ？その人はお姉ちゃん？」

「……まあ、そんなものかな」

シオリが聞いてきたので本当の事を（嘘を混じえて）話しながらポケットに手を突っ込む。クシヤリ、と指先で紙を潰すような音が聞こえ、それを摘んで引つ張り出すと、それはなにかのメモ用紙だった。こう書かれている。

『『貴女は阿座河村へ。そこで全てわかる』』

見た回数は少ないものの、字の終わりが跳ね上がる傾向にあるクセは、話題に挙がった紫の執筆したメモで間違いはなさそうだった。

「じゃあ、あんたが来た理由を教えてくださいよ。どうしてこの駅で降りたんだ？」

「私は……さっきも言った通り、両親がいなくなつて。親戚もないから、もうひとりぼっちかと思つていたんだけど、これを見つけて」

シオリが出したのは、一枚の写真。シオリと思われる女の子と、若い夫婦。その隣に老齢の男性が立っていた。

「そのおじいさん、多分私のおじいさんなんだろうと思うの。それで、阿座河村って名前の村に住んでたらしくて」

その名は偶然にも魔理沙の目指す村と同じ名前だった。

「へえ、じゃあ私と同じ行き先なわけだ。偶然か必然か、まあこうして一緒になったんだし、その阿座河村まで一緒に行こうじゃないか」

シオリは魔理沙の言葉にうんと頷き、写真を懇切丁寧に仕舞う。最早最後の肉親との繋がりを保つ唯一のキーでもあるのだから、その扱いにも納得が行く。

「……で、どう阿座河村まで行くんだらうな」

「うーん………あ！バス停があるよ、バスで行くんじゃないかな？」

シオリが見つけたバス停に駆け寄り、時刻表をチェックする。壁掛け時計の時間が14時を指しており、次にバスが来るのは17時20分、つまり3時間後だ。

「………あと、3時間もある」

「うげえ、3時間待たされなきゃいけないのか」

「仕方ないよ、こればかりは。待つしかないよ」

シオリに諭された事もあって、魔理沙はシオリと同じく大人しく待つことに決めた。



夕方になつても来ないというのは、いくらなんでもおかしいじゃないか。魔理沙が苛立ちを隠さずに呟いた。シオリも、定刻を過ぎたのにこないバスを待ちわびて、疲れた様子だった。

「おかしいなあ……もう来てもいい頃なんだけど、来ないなあ………」

「何かのトラブルか？ 動かなくなっちゃったとか」

「それならきつと代わりのバスが出るはずだよ。何で来ないんだろう……」

夏の暑さも相まつてくたびれ儲けの体をすら成すことが出来ないふたりは、バス停に備えられたベンチでひたすら汗を垂らしている。時折水を補給し、強く吹く風に身をふるわせる。汗をかいた体に、風は毒である。

「ううつ、寒い……。もう来てても良いだらろ」

残念ながら、魔理沙のその呟きに答えることは、シオリには出来そうになかった。確証がないのだから、仕方がなかった。



「いくら！なんでも!!おかしいだろう!!!」

「さすがにね…………どうなってるんだろう」

暗くなつて既に半刻が経過している。時刻は既に18時を回っていた。にも関わらずバスは一度も止まらなかつた。それどころか通つた形跡すらない。そもそも通つたなら止まるはずだろ、と魔理沙が吐き捨てる。

「駅を間違えた?でもそんなこと…………」

「あるわけない。そもそも阿座河村に行くバスが通るのはこの駅だけらしいから、ここできやダメなんだ」

「だよね…………何でなんだろう?」

私に聞くなどばかりに頭を搔く。どうして止まらない?どうして通らない?そんな考えに答えが出るはずもなく、一日数本の自動車もこれ以上来る気配はなく。早速詰みの

状態だった。

そこに助け舟が出された事ばかりは神に感謝するべきなのかもしれない。あまりに身近過ぎた神に礼を言うには、幻想郷はフレンドリーすぎるくらいがある。

「おい、その君たち！何をしてるんだ！」

不意に聞こえた声の方に振り向くと、青い制服を来た青年がそこに立っている。どうやら見回りをする職務に就いているらしい。腰には黒いホルスターと拳銃と思わしき物体が提げられており、かなり前に紫から聞いた話と併せても、彼の職業は『警察官』で間違いなさそうだ。

「……あ、いえ。バスが来なくて……」

シオリが返すと、その警察官は片眉を下げて心配そうに答え直した。

「バス？……ああ、利用者が少なくって、廃止になってるぞ」

「え……………？」

「ええっ！バスも来ないはずだぜ、そりゃあさー！」魔理沙の怒りも尤もだった。来る、来る、そう思って待っていたバスが来なかったのだ。この4時間、ただの骨折り損になっってしまった。

「なんだ、阿座河村に行くところだったのか？」

「はい」と、シオリが出鼻をくじかれたとばかりに悲しそうに答える。

「なるほどなあ……………そつちの嬢ちゃんは？」

ぐるりと辺りを見渡してようやく（私のことか）と気付いた魔理沙も、シオリと目的は変わらないと伝える。

「私も一緒だ。阿座河村に向かうところだった」

その警官はひとしきり思案したあと、微笑んで続けた。

「よし、若い子がこんな所で二人きりなのも危ないしな。パトカーで良けりやあ、阿座河村まで送っていくぞ」

「……………いいんですか！」

「もちろんだ。……………で、村のどこに行くつもりだったんだ。そこまで送っていくつもりだ」

シオリがその言葉を受けて地図を広げる。指を差した場所には、他の民家よりもかなり大きく、後ろに広大な森を抱えている館が記されている。

「おう？……………ああ、ここは資料館だな」

「資料館ですか？」

「ああ。なんでも昔は大層立派なお屋敷だったそうだけどな、持ち主のおじいさんが死んでからは資料館になってるんだよ」

「……え……………？」

シオリの表情がみるみる固まっていくのを、魔理沙は見ることしか出来ない。その亡くなったおじいさんというのが、恐らくは最後の血縁だったのだろう。しかしながら、今魔理沙がしてやれる事は何も無かった。

「……………君、資料館に何の用だ？」

「あの……………その、身内を……………」

シオリが、明らかに消沈してしまっている。仕方の無いことだ。自分が会いたかっただろう相手の死を、見知らぬ人から淡々と教えられたのだから。だが当の本人は気付かないのか、疑問符が浮かび上がりそうな上がり眉のまま、シオリと私に話を続けた。

「よし、取り敢えず乗っていきなさい。この時間から歩いていくんじや、着く頃には資料館も閉まってしまいうから。それでいいか？」

「……………はい。魔理沙ちゃんも、それでいい？」

「私は……………別に構わないぜ」

「じゃあ後ろに乗ってくれ。資料館までは30分は掛かる、気長に待ちなさい」

車が発進して直ぐにラジオがかけられ、ポップな音楽が車内を明るくしようとする。警官は気を利かせてくれたんだろう、だがシオリはそれどころではなかった。その隣にいる私にも負のオーラを感じ取れているほどだ。

「どうするんだ？……………私とシオリは、そもそも目的が違うんだ。シオリが嫌なら、別行動



しても——」

「いいよ魔理沙ちゃん。亡くなつたと言つても、遺品とかから何かわかるかも知れないし。ね？」

「……まあ、それは一理ある」

車に揺られながらも、車窓の外を眺め、時折シオリの表情を隠れて伺う、それくらいしか魔理沙にできることはなかった。

## 二話『資料館・表』

魔理沙がボタンと車のドアを閉めたところだった。

「あの……ありがとうございます」

「ああ、かまわないよ」

全員が車から降りたあたりでシオリが礼を言っていると、警官は良いからと言うような、笑ったような表情で答えた。

「それより、本当にこんな所に用事があるのかい？」

「はい」

「お嬢ちゃんも？」

「嬢ちゃ……まあ、私もそうだ」

訝しむ警官がシオリと魔理沙に聞く。二人で肯定すると彼は少しの間頭を垂れて唸る。うーん、と、時間にしてわずか5秒もないだろう。顔を上げて二人を見やったあとに屋敷の方を向く。

「……………まあ、時間外だけど管理人はいると思う。……………ただそいつは時間に厳しくてなあ。入れてもらえるかどうか……………」

「ええ……そんなものなのか、資料館って……」

「普通はそんなものだよ」

魔理沙の独白にシオリが切り込む。わかってらあ、と魔理沙が返すが、シオリにはもうその言葉は届いていなさそうだった。じつ、と屋敷を見続けているのである。恐らく魔理沙が独白した時あたりから。

「……ま、何かあつたら、派出所に連絡入れてくれればいいから」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、またな」と言つて警官は車に乗つて去つていく。太陽はほとんど沈みかけていて、明るい方角の反対側から月が既に雲の間から顔を覗かせている。

「……とりあえず、入るか？ そうしないと始まらないだろ」

「……よし……入ろう」

魔理沙が入ろうと促し、シオリが領いて資料館のドアに手をかけた。扉を開くとやはりと言うべきか閉館済みであり、館の床や壁を薄らと照らすのは、窓から僅かに差し込む月明かりだけだった。館の中に人工的な光源は全く見られない。

「……」

「……暗いね」

シオリはこの暗さに怯えるほど怖がりではない。なのに頻りにしきに辺りを見渡してい

る。それは、彼女がこの屋敷にどこか懐かしさを覚えているからだつた。

(……………なんだろう。懐かしいこの感じ)

彼女の思考を遮るように魔理沙が呟いた。

「しっかし、暗いのはダメだろ。ほれっ」

ポーチからミニ八卦炉を取り出し、発光させる。白い光が周囲をぼう…と照らし、その曖昧な明るさはさながらランタンのようである。

「わっ、明るいね、それ」

「一番のお気に入りの道具でさ。これ一つで色々できるんだよ。例えば……………ほら」

そう言つて光を消し、火を灯す。シオリは目をぱちくりさせていた。

「わあ……………万能ナイフみたいなものなのかな」

「万能ナイフ? ナイフじゃないけど……………ま、万能だぜ」

この八卦炉には様々な機能を知人に詰め込んで貰っている。ライター、ライト、扇風機……………などなどだ。魔法触媒としての八卦炉を除けば、一番の目玉機能はマイナスイオンを放出する何か……………細かくは忘れたが、リラックス効果のある物質を内蔵しているのだ。

魔法に比べれば利便性に欠けるが、現代人の目にはどうやら万能に映るようだった。

「それってやつぱり高級なお店から買ったもの?」

「うんにや、知り合いの………というか、いつも世話になつてる人に作つてもらつた。あいつ凄いい世話焼きだからな」

森近霖之助  
あいつ。彼は魔法の森と呼ばれる危険地帯のすぐ近くで骨董品店を営む、一風変わった男だつた。彼の力のひとつに錬金術的技術があり、その力を借りて、彼の手になるミニ八卦炉は魔理沙の手に渡るまでに幾つか特長を得ていた。この八卦炉は決して錆びない金属を使われていると言つてもいい。何故ならヒヒイロカネという特殊な金属が使われており、そのおかげで錆びないのだ。そもそもヒヒイロカネという希少な貴金属は錆びることなく存在し続けると言い伝えられ、ちようど香霖の在庫を使つてもらつた事で、ミニ八卦炉はより発展を遂げている。

少量ではあるものの魔力を貯めておくこともでき、魔理沙の魔力消費を最低限に抑えつつもこれ単体で廉価版のスペルカードをすら放つ事が可能な優れたものなのである。

「じゃあ、それで明かりは確保できたね」

「管理人とやらが何処にいるか、探そうか？どの道このままじゃ待ちぼうけだしな」  
「そうだね。もうひとつくらい明かりは欲しいけど…」

そう言つてシオリが暗くて見通せない通路の先を見やる。

「なら………」

そう言つて魔理沙が八卦炉を手元に置いて、ひとつの棚に着目する。鍵がかかつてい

て、一見開きそうにない。が、魔理沙の日常で鍛えたスキルがここで活かされるのだ。ポーチに仕舞った道具のうちひとつ、典型的な細く加工しやすい針金と太く頑丈な針金の二本を取り出す。

「ん……………何をするの？」

「見てわかるだろ？ 『ピッキング』だぜ」

「ええっ!？」シオリが驚く。至極当然の反応ではある。同行者が急に泥棒紛いのことをするなどと言うのだから、その反応にも納得できる。だが魔理沙はそんな事は気にも止めない。彼女の魔法使いとしての実績の裏に積まれたもうひとつの顔は『泥棒』である。旧型の鍵は尽く破ってきたし、魔法でかけられた強力な錠も打ち倒してきた。なんなら最近幻想入りしたという新型錠すら魔理沙の敵ではなかった。外の魔法使いの小説には鍵を開ける魔法があるらしいが、そこまで万能ではない。すなわちピッキング能力とは、すべからず魔理沙の特権である。

「ほれ、開いたぜ」

「……………ええ……………」

魔理沙は5分とかからず柵の鍵を開けた。中には雑多な紙と別にランタンが入っており、経年劣化が目立ちすぎるもののまだまだ現役そうだった。中に火を灯すと、それをシオリに手渡す。

「これで『明かりは』確保できた。じゃ、いこうぜ」  
「う……うん………」

手馴れた様子で特に動揺すらしないう魔理沙に、シオリは彼女の半生がどういったものだったのか気になって仕方がなかった。……だが、こうして鍵を平然と開ける魔理沙と彼女から聞いた過去を照合すると、もしかして彼女にとつて自身の過去はあまり語りたいものではないのではないか？ そう考えてしまつてか、聞き出せそうになかった。

「私はこつち調べるから、シオリは別の場所調べてくれ。何か……というか、管理人とやらを見つけたら連れてきてここで待つて事でいいか？」

「わ、わかつたよ。ここにね」

「そ、ここに。んじゃ、また後でな」

そう言つて魔理沙は歩いて廊下の向こうへ行つてしまった。「私も探さないと」呟いて、シオリは正面にあつた階段を登つていったのだった。



シオリが階段を登り切るとそこには廊下がありふたつに分かれている。曲がり角に当たるまでに部屋があり、その部屋を覗くと古ぼけた時計や劣化したたんすが無造作に置かれている。ふと気になってたんすの一番上の段を開くと、適当に置いたのだろうか、ただ鍵だけがそこにあった。

「これはどこの鍵なのかな」

そこまで考えて、シオリはハッと思い直した。

「(いやいやいや、それじゃ泥棒みたいじゃ…)」

そこまで考えてからシオリは心の口を結ぶ。「魔理沙ちゃんは平気そうだったけど…普通はダメ………だよね」そしてそう考えたあとに、鍵をズボンのポケットに入れた。後で返せばいいか、そう思ったのである。

他に何も無いことを確認して部屋を出ると、次はこちらに行こうかともう片方の分かれ道へ向かった。無造作に置かれたパイロンがこの先には行くなど言い表しているようで少し薄気味悪かったが、管理人さんを探すためだと割り切つてパイロンを押しつけて先へ進む。行き止まりには扉があり、手をかけても開かない。「(行き止まりかな)」そう思いつつも戻ろうとする。



ガタツ。

物音が聞こえた。この扉の奥から。ネズミか、猫か。はたまた鍵をかけて何かをしている管理人さんか。シオリは扉の先の未知に向かって声をかけた。

「……………あの〜……………すみません……………」

「……………誰？」

一呼吸置いて扉の先から声が聞こえてきた。それは大人びてはいるものの、まだ幼さの残る声色だった。シオリは返ってきた声の正体を調べるべく質問する。

「あの……………管理人さん、ですか？」

「私は管理人じゃないよ」

はつきりとそう言い切った。違うのか、とシオリは肩を落とす。今度はこちらが聞く番だとばかりに少女の声はシオリに聞いてきた。

「……………そう聞くとて事は、管理人じゃなさそうね。何をしにこんなところまで来たの？」

「あ、えつと……………私は……………知りたい事があって、ここに来たものです」

シオリが答えると、しばらく唸るような声が聞こえるが、一瞬唸り声が途切れたかと思うと、少女の声はシオリに切実そうに頼んできた。

「お願い、とりあえずここから出して」

「……………はい？」

困惑する。少女はここに入って自ら鍵をかけた訳ではないのか。考えを巡らせていると、少女は尚も続けた。

「……………隠れていたら、鍵をかけられて出られなくなったの」

「え……………どうしよう、それこそ管理人さんは？」

「知らない。というか、見つかりたくない」

少女の物言いは、管理人さんを毛嫌いしているようにも聞こえる。

「え、どうしよう……………派出所に連絡しようか？」

シオリがそう言った途端、部屋の奥から大きな物音が聞こえてきた。予期しないことを聞いて、驚いたかのような感じだった。それが正しかったのだろうか、少女の言葉遣いも荒いものに変化している。

「嫌!!派出所つて、望月巡査でしょ!?!それだけは嫌!呼んだら舌を噛み切つて死んでやる!!」

「え……………じ、じゃあどうしたらいいの?」シオリが更に困惑を重ねていると、壁にできた小さな穴からひとつ、きらりと光る何かが放り出され、床に落ちた。見てみるとそれは光沢のある鍵だった。光を反射する程なのだから、きつとつい最近作られたものかもしれない。

「……………それで、この部屋の鍵を探してきて」

——この鍵で？一瞬渡された鍵で開くのでは、内側から開かないだけなのではないか、そう思ったがそんな訳はないだろう。態々わざわざ鍵をかけて閉じこもるのか？そもそもそれは出来ないじゃないか、つまりそうい閉じ込められたということである。

「多分、一階の部屋の鍵だと思う。……お願い、早く」

「……………わかった。少し待っててね」

シオリは部屋を後にした。

## 三話『資料館・裏』

屋敷の中でめぼしい物を物色：ではなく管理人の搜索を行っていた魔理沙は、風呂場、トイレに続く台所がある部屋を見つける。台所のタイルの一部は焼け焦げており、テーブルの上にあった作り置きと思われる料理は、その全てが炭のように真っ黒だった。

「うげえ……これ、全部食材からできてるのか？」

ありえない、そんな顔をしながら表情をしかめる。見た目は炭、匂いも炭。なら味も炭なのだろう。食べた事こそないが、炭の味を想像して吐き気を催す。

手袋を着けて肉と思しき炭の破片を指先で摘む。指に力を込めると瞬く間に砕け、バラバラになって更に残りが落ちた。ここまで炭だと、もはや関心すら覚える。

本来炭というものは密閉され酸素と有機物が結合できない状態で火にかける事で、水蒸気とガスだけが飛んで密閉空間に炭素だけが残る。その状態が焼肉などに使われるあの炭である。だが、目の前のキッチンにはどう見てもフライパンと油しかない。そんな密閉することの出来る装置など存在しない。

もはや錬金の領域である。

「しかし、これを料理として捉えると最底辺以下の点数だな。まずこれは料理じゃない」炭を潰した指先を見る。黒い粉塵がゴム手袋にくっついており、摘むような形で指先同士を擦り合わせると、黒い粉がパラパラと散って行く。こんなものを食べるやつが資料館にいるのか？

そう思っていると、上の階から物音が聞こえてくる。何か重たいものを動かして床に置いたような、鈍い音である。二度、三度と鈍い音が聞こえ、続いて意識しなければ聞こえない程の小さな音で、微かに聞こえる足音。

「なんだ…？」

女性の出す軽い足音ではない。男性のような体重のある人間の足音だった。それは真つ直ぐ下……つまりこの階に来ていいるという事になる……というより、こつちに近付いて来てる…!?

「ヤベツ……！」

焦る。隠れる場所もない、戻ることも出来ない。いや落ち着け、足音を聞いて、こいつが迫っているかを冷静に判断して…。

ギシ……ギシ……。

ダメだ近付いてきてる！ヤバイヤバイヤバイ!!!!

外見こそ平静を保っているようには見えるが内心では狂乱の如く焦り、どうにか出来

ないかと解決方法を模索していた。(隠れる…却下、まず隠れられん。次、逃げる…どこに?次、ぶん殴って気絶させて逃げる…いやダメだろ、相手は人だぞ!しかし暴漢という可能性を否定できない……うあああ!もうどうすりやいいんだってのこれ!!!)

魔理沙が魔法を使えない今となつては、身体能力の平均的なただの女の子である。暴漢に対する抵抗策など、持ち合わせてはいない。走って逃げる、隠れるくらいはできるが、それだけだった。

焦る合間にも、足音は近付いてきている。「ええい、こうなりやままよ!」身を翻してキッチンテーブルの裏に隠れた。幸い大きなサイズのテーブルだったので、隠れるに不足しなかった。八卦炉の灯りを消し、息を潜める。

ギシ、ギシ、と木材の床を踏む音から、カツン、カツンというようなタイルを踏む小気味よい音が魔理沙の耳に届いた。台所に入ってきたのだ。いくら隠れているとはいえ、物音を立てることなく背後を取るような器用な真似はできない。だからこうやって身を伏せて姿を伺うしかできる事は無い。

(入ってきたな……どんな格好してやがる…?)

その男の姿を見た時、魔理沙は『ギョツとした』、そんな表現が本当に似合う程に大きく驚いた。(……刀だつて!?)男の姿を口頭で伝えるに一番早い特徴は、何と言つてもその左手に携えた『青く輝く居合刀』である。全身を黒衣で覆つたような真つ黒な布地

に、青い光が反射している。男の顔は光の影になっていて目が見えない。酷く不気味だった。

(なんだ……あいつ……!?)

男は魔理沙のいる台所へと真つ直ぐ向かってきていた。

(このままじゃ、バレる……いちか、ばちかだ!)

「くらえっ!」机の裏から飛び出て、ミニ八卦炉を男に向ける。男は一瞬たじろぎ、次の瞬間には目を抑えてしゃがみこんでいた。

八卦炉の火力から生み出される光を濃縮、その状態の光の塊を、相手に思い切りぶつける攻撃である。……とは言っても攻撃力は皆無、魔力も全く使わない完全なる護身術である。が、暗闇で打ち出される光の波は暗がりを歩く男の目には効果てきめんだつたらしい。

(今のうちに……!)

走つて台所を後にする。閃光だけでは耳は潰せないで、音を聞かれては困る。「どこに行くべきだ……」シオリを置いていく訳にも行かないので玄関から出る事はできない。かと言って階段を登ってしまえば音を立ててシオリの方にこの男を行かせてしまいかねない。

(……で耐えるしか……ないのか……!?)

逃げ場なく立ち往生だった魔理沙の後ろに、男が立っている。目眩しの効果が終わってしまっただけらしい。後ろを振り向くと、魔理沙に拳が突き出された。

(っ……………!)

目を閉じて衝撃に備える。

(……………?)

しかし、殴られた痛みも、衝撃も来ない。恐る恐る目を開けると、魔理沙の眼前には一枚のメモ用紙。そこに万年筆で短い文が添えられていた。

『ここに何をしに来たの?』

(…!?) 一瞬思考が追いつかなかった。なぜこの男は攻撃してこない?なぜこの男は話さない?……………そうして、ひとつの答えに思い至った。魔理沙が一方的に、男に対して敵意をまとっていただけたのだ。

『ここはもう閉館しています。』

『お母さんはいるの?』

ズボンのポケットから三枚ほど紙を取り出し、一枚を仕舞った後に残った二枚を魔理



沙の前に出す。

(……………話せないのか)

そう考えると、もしかするとこの男は悪い相手では無いのではないか、そう思い始めた。もしかしてこの男はこの管理者だったりするのだろうか。

「その……勝手にすまん。友達がここに用があるつてんで、私も人探しにここに来ただけなんだよ」

魔理沙の言葉を聞いた男は少し考え込んだ後にメモを取り出し、万年筆で文を書き、それを魔理沙に見せた。

『僕は管理人です。』

『その人は、今どこに?』

ああ、やっぱり管理人だったのか! 魔理沙は申し訳ない気持ちで胸が詰まりそうだった。

「多分、上だと思う。私はどこにいたらいい?」

『とりあえず、ここに。帰る場所は?』

窓の外を見る。時刻は既に8時を回ろうとしており、それに相応しく外の暗闇は空まで広がっている。月を隠すように空を雲が覆っていた。これじゃ他の家にお邪魔するのは無理そうだな。そう考えた。

「あー…その、無い」

『待ってて。探してくる』

そう言つて男は階段を昇つていった。今この時に魔理沙ができることは、何も残つていなかった。

## 四話 『資料館』

「……………」

魔理沙は未だ戻らない管理人やシオリがどうしているか、気にかかって仕方がなかった。ソワソワというか、イライラというか。資料館の中は掃除こそされているようだが、細部に埃が溜まっているらしく、床に埃の塊などが転がっていたりなど、注意して見れば微妙に目立つ汚れが彼女の鼻腔をくすぐっていた。

「……遅いなあ」

一人、ぼそりと呟く。ミニ八卦炉のフラッシュが辺りを照らしているが、一向に二人のどちらかも来そうにない。本を読もうかとも思ったが、暗いせいでまともに読めず、いたずらに視力をすり減らすだけだろう。

とん、とん。肩を叩かれて振り向いた先には、先程の管理人がいた。メモを差し出してくる。彼の周りにはシオリはいなさそうだった。

『魔理沙さん』

「…………… どうした？ なにかトラブルか？」

『中に人がいます、玄関の鍵を閉めます。管理人室で休んでいてください』

「……ん。わかったよ」

ガチャリ。玄関のキーを使って鍵を閉め、管理人が階段を上っていく。かなりの高身長だったが、凄まじい目つきの悪さをしていた。そんな事を考えていると、上の方からどたどたと、煩わしい音が聞こえてくる。誰か……というより、シオリか管理人のどちらかが走っているのだろうか？

……だが、その考えは間違いだった。魔理沙の前に姿を現したのは、濃い紫色の珍しい色合いの髪をした、女学生だった。

「はあ、はあっ……っ……誰、あなた？」

走ってきたのだろうか、息を切らした女学生が、魔理沙に名を尋ねた。

「……霧雨魔理沙。なあ、シオリ見てないか？」

「シオリ……ああ、あなたお姉さんの友達の人？早く出た方がいいよ、ここの管理人、頭おかしいから……」

「頭がおかしい……って、なんじゃそりや？」

「いいから……っ?!鍵閉められてる!……ああ、もうっ!」

女学生が、鍵のかかったドアに拳で殴りつけるが、いくら木製のドアとはいえ、少女の力では傷一つさえ付かない。苛立つ少女と、それを見かねて声をかけようとする魔理沙。そこにシオリが現れた。

「…… あつ、さっきの…… あ！魔理沙ちゃん！大丈夫だった？」

「え？大丈夫って…… 何が？」

魔理沙が困惑する。女学生は二人に向かつて焦るように言う。

「とりあえず、私は別にどこか出れる場所を探すから。お姉さん、と…… そのの、魔理沙さん？はアイツに見つかっても私の事、絶対に言わないでね」

そう言い残して女学生は別の部屋に入ってしまった。シオリと魔理沙が残される。

「あつ、待って！…… と、とりあえず魔理沙ちゃんも出た方が良い…… みたいだよ？  
じゃあ、後でね」

「ちよつ、待つ……」

魔理沙が引き留める間もなく、シオリも二階に上がって行ってしまった。「参ったな…… 管理人と会ってるって、言う間もなかった」と、魔理沙は頭を悩ませるしかなかった。とにかく待っていれば管理人が二人を捕まえてくれるだろうと思つて、一階のどこかで休もうと部屋を移った。



二階へ続く階段を、音を立てずに昇っていく。時折床が軋む音が、上の階から聞こえてきた。

「とは言つても、他に出られそうなの……… といつか、開いてた場所つて三階の部屋にしかなかったよね…… どうしよう」

シオリが考えながら階段を昇っていると、不意に目の前に青く輝く、長い何かが見えた。それはピンと沿っており先端は鋭く尖り、まるで刀のような印象を与える。シオリは目を凝らす。

「…………… 刀？」

…………… そして、それは確かに刀だった。原理はわからないが、妖しく光る刀身に照らされるのは、上下に黒い服を着込んだ、とても身長の高い男だった。その男はどろろ後ろの扉から出てきたらしく、後ろ手でドアの閉まりを確認すると、辺りを見渡すような素振りを見せてから廊下を歩いていった。

「…………… から、出てきた……… のかな」

シオリがドアノブに手をかけると、鍵は閉まっておらず簡単に開き、中には数冊の資料などが収められている本棚がある。カンテラに火を灯すと、部屋の様子はより一層顕になり、机の上に光る石が置かれているのが見えた。その他に薄く光る装飾品の様なものが飾られたガラスケースや、人物画が壁に掛けられている。

人物画は相当古いかか擦り切れてしまっており、顔の部分の判別が殆ど付かない。それに、それ以上に目を引くのは、机の上に置かれた淡く光る石だ。

「……………綺麗だなあ」

指で触れると、冷たくも光が温もりとなつて指に伝わってくるような気持ちになつた。暖かいというか、安心感のようなものを覚える。

石の詳細が知りたくて周囲を見渡すと、この石についての細かい記述がなされた張り紙があつた。

『——夜光石——』

「やこう…せき……………」

『これは夜光石を球体に加工したものである。大昔、村の、オガミ様 と呼ばれた霊能商を行つていた村民は、これを使用していた』

霊能商。そして夜光石を使用していた……………そのワードを見て、シオリは二階で読んだ絵本の中に、夜光石をつかつて、ことりおぼけ、を撃退したという男の存在が浮かんだ。

「……………もしかして、昔からある石だったのかな」

夜光石から離れながら、思案を重ねる。——思わず触ってしまったが、仮にも展示品なのに、触つても良かったのだろうか。そんな事を思いながら部屋を出た。

……  
無論、音は立てずに。



## 五話『管理人』

——佐久間美夜子は、本当に困った来客だった。学校が終わる17時ごろ、突如この資料館にやってきては、二階の展示室や、酷い時は立ち入り禁止の警告を無視して三階に入り込み、貯蔵された古い資料や、本当にやめて欲しいのだが、神崎家のアルバムなどを読み漁る。

「……げ、管理人……！」

今日もまた、もう夜になるというのに。しかも中学生がこの時間まで外出しているのは危険だ。既に警察に届けており、玄関先にパトカーが止まっている。佐久間は嫌がるだろうが、外で望月巡査が待機してくれている以上、詰みである。

しかし、困った事に小柄な彼女は隠れるのが本当に上手い。隠れんぼをするような、活発な性格ではなかったはずであるが、こと隠れることに関してはさすがに勝てない。だから鍵を閉めるのだ。

どこかに隠れていても、こうして炙り出せる。

——なのに、今日に限って不運が重なってしまった。



ドアを開け、右左、また右と見、部屋を出てゆつくりと扉を閉め、三階の方を見る。さっきの男の人が昇っていった先なのだが、不穏な予感がする。さっきの女学生はどこに行つてしまったのだろうか？

「いやあッ!」……そう思っていると、甲高い悲鳴が聞こえた。

「……っ!?!」

さっきの子の声だ! シオリが振り向いた先は、三階だ。上の階から悲鳴が聞こえてきたのだ。カンテラを向け、急いで走る。廊下を抜け階段を昇った先に、彼は居た。黒い

見た目に青く輝く日本刀を持った彼は、誰かを追い詰めている様子だった。

「っ……!!」

彼女の呻き声のようなものが聞こえたかと思うと、短い廊下を駆けていく短い感覚の足音。それに続くように、追いかけていくように、更に短い感覚の足音が彼女を追いやつていく。

「いやーやめて！触らないで!!」

あの子の悲鳴、何かを強く縛り付ける音。そして、ドアが閉まる。音を立てないように駆け寄ってドアを調べてみるが、鍵がかかっている。中で物音がしているが、音がくぐもつてよく聞こえなかった。

そして、こちらに足音が向かってきている事に気付いた。

「……ど、どうしよう……!」

廊下を見渡す。扉が3つ、うち奥のものは開かない。下に行つても魔理沙ちゃんがいるからどうしようもない。ともすれば、部屋に逃げ込むしかなかった。

すこし迷つて真ん中の部屋に鍵のかかかっていない窓がある事を思い出し、その部屋に逃げ込む。ドアが開く音と同時に中に隠れる事が出来たが、その姿を見られたか或いはドアの閉まる音でも聞かれたか、走つてこちらに向かつてきていた。

「……! そうだ、ロープ!」

拾っていたロープをドアノブに括り、ドアの枠からはみ出ている突起に縛り付ける。しばらくしてドアノブが回るが、開かないとわかったのだろう、荒々しくノブを回したり、ドアを開けようとしている。

「…… どうしよう、このままじゃ」

窓から飛び降りることはできない。三階から飛び降りれば、間違いなく重傷を負うだろう。かといって、このまま待っていてもいつかロープがちぎれ、ドアも破られて捕まってしまうだろう。

「どうしよう……と、そこまで考えて「…… そうだ……！」と、ひとつの考えが脳裏をよぎった。向かうは部屋に置かれている古びたダンス。二段目を開き、中から沢山ある『壊れたランプ』を手取る。

「（これを窓から落とせば……！）」

急いで窓に駆け寄り、勢いよく開く。強い風がシオリを吹き付けた。壊れたランプを両手で持ち、地面に投げつける。『ガッシャン！』と、ガラスが割れて高い音が辺りに響いた。ドアを開こうとする動きが止まり、シオリの呼吸も潜み、周囲を一瞬の静寂が包み込む。

走る音が遠ざかっていき、荒く階段を降りていくのを最後に足音は聞こえなくなつた。

「た、助かった.: のかな」

それより、あの女の子はどうなったんだろう。そう思つて静かにドアを開け、先程のドアを開けようと試みる。

だが、無情にも出る際に再度鍵をかけたらしく、ドアはうんともすんとも言わなかった。中からは声も何も聞こえないので、もしかするとここにあの子が閉じ込められた訳ではないのかもしれない。

なら、下に魔理沙ちゃんがいるし、早いうちに合流してしまいたい。あの男の人が彼女に何かをしない保証はないけど、私と違ってあの子のように魔理沙ちゃんも身長は高くない方だったし、ピッキングなんかをしようくらいには器用だから、何かしらの方法で逃げ延びているだろう。

..... 問題は、私の方だ。足に自信はあるが、彼女達と比べて私は身長が大きいうえ、服装もかなり目立つ。黄色のシャツは、暗闇でも月明かりなどを良く照らし返してしまうだろう。暗がりにも隠れるのも難しい。

「とりあえず、下に行けていない場所があったから、そこを調べるほかないかな.:」  
やる事をまとめ、階段を慎重に降りる。幸運にも一階に着くまでにあの黒服の男の人と鉢合わせ、といった事は無かった。

..... だが同時に、魔理沙ちゃんの姿もなかった。隠れているのだろうか。器用に

隠れていてくれれば、通りがかった時に声をかけてくれればすぐにわかるのだが。

それよりも、目下のところ玄関の扉は閉まっており、玄関の鍵もない。脱出の目処が立たないままなのだ。となれば、行先はひとつしかない。玄関から見て左方向に、キツチンがあるのを確認した。その先には鍵のかかったドアがあり、そこが開けば何かわかるかもしれないのだ。

あまり時間もない。走ってドアまで辿り着く。ドアの鍵は開いていたようで、ドアノブは静かに回った。

「……………」

生唾を飲み込み、扉を開く。そこは先程展示されていた夜光石によって照らされた、静寂を蔽かさが包み込んだような空間だった。奥からは何かを動かそうとする音が聞こえてきた。足音を立てず、ランプを消して近付く。

「ふくん、ふくん、ふくん、ふくふくん……♪」

この声色は……それに、鼻歌………？

陽気さが伝わってくるというか、緊張感がないというか確かにその鼻歌は魔理沙ちゃんのものだった。

走り寄って、彼女の姿を確認すると、後ろを見返して誰もいないことを確認してから話しかけた。

「ねえ、魔理沙ちゃん……！」

「……ん？… ああ、シオリか。待ちくたびれたぜ。話したい事があってな、シオリがヤバいつて言つてたその管理人の話なんだけど、そいつ実は——」

「……!?待って……！」

「ムガツ！ムグモゴ……」

何かが聞こえてきて、つつい彼女の口を塞いでしまう。

……カツン……カツン……カツン……

石の床を靴で踏む音。近付いてきている。

「……！」

曲がり角から、青く光る刀を持った青年がこちらを覗いた。私と目が合うと、その青年は素早く駆け寄つて来、シオリの眼前に拳を突き出す。

「きゃ……！」

短い悲鳴を上げて、反射的に目を閉じる。だが、殴られる衝撃などは来なかった。恐る恐る目を開けると、そこには一枚のメモ用紙があつた。

『閉館時間を過ぎています。』

警察を読んでいます。ロビーへ』

「は……え、でも……え、その、刀は……」

困惑に困惑を重ねていると、後ろから魔理沙ちゃんがぼんぼんと肩を叩いてきた。振り向くと、彼女が（わかるよ）とでも言うようなにやけ顔で頷いていた。

『模造刀。』

管理人です』

それを知って、一気に脱力してしまったのだった。



## 『閑話休題』

「——そうだな、私も少しぐらい、顔見せてやろうかな」

魔理沙がそう言ったのを聞いて、シオリは優しい笑みを浮かべた。そして、はっとした様子で魔理沙に質問を投げかけた。

「……魔理沙、さん……は、どこの出身なんですか？」

「ん？……出身ねえ」

そう聞かれると、どう答えようか悩んでしまう。正直に言っても幻想郷だなんて言われたってシオリも困惑してしまうに決まっている。だが、かといって外の地理には疎く、適当言ったところでボロを出す確率の方が高い。

「そうなあ……ずっと、向こうだよ。人が近付かない、ずっと山の向こうがわ。そこじゃ、神様とかが凄く身近にいてさ。いっつも喧嘩したり酒盛りしたりしてんだ」

「それって、とても素敵ですね。神様を身近に感じられるって、とってもロマンがありますね」

シオリが目を輝かせる。

「うんにゃ、そんな良いもんじゃないぜ。ご利益だつてあんだかないんだか。それに案外粗雑に扱われてる。実際私の親友で巫女をやつてるのがいるんだけど、そいつ自分の祀つてゐる神様の名前忘れてんだぜ？」

そう言つて親友の顔を思い出して含み笑ひする。シオリは、魔理沙にとつて神様とは思つたよりカジュアルな存在なのだろうか、と考えた。

「それに、そいつらが何かしらの異変なりを起こしたら私達が治めに行くからな。忙しくてたまつたものじゃなかつた。それに、私にとつてあつちは騒がしすぎたらしいもので。こうして電車に揺られているのが、今は楽しいんだ」

魔理沙は誰もいない座席に手を着き、足を伸ばして伸びをする。シオリも隣に座つて、彼女の話の聞こえと身を傾ける。

「じゃあ、元々電車に乗れるような場所に住んでなかつた……つて事ですか？」

「ん……まあ……そうなるかな。というよりは、元々電車みたいなのが無くて、基本空を……いや、徒歩だったなあ」

魔理沙は頭を掻き、へへへつ、と笑う。

「……思つたよりも、過酷な所で住んでみたいで、なんか興味湧きますね」  
「そうか？不便つてつまらないぜ。私としては空を飛ぶよか車とか電車とかに乗れる方がずつと楽だ」

「空…… 私は飛んでみたいですけど、ヘリコプターなんて乗った事ないし、子供の時にちよつとした旅行で飛行機に乗ったくらいで……」

「飛行機！あのでっかい鉄の箱か…… 良いなあ、私のいた所じゃあ妙ちくりんながらくりしか拝めなかったから、話を聞くだけでも楽しいもんだ」

シオリは、そう言いながら笑みを浮かべる魔理沙を見て、まるで別の世界に生きてきたような存在だと思わずには居られなかった。常識に縛られない彼女の雰囲気は、シオリの目にはどこことなく西洋的、或いは古風に写った。

「ああ、それと…… 私はまだ16だ。あんた見たところ、私より3つか4つは上だ。私だけ砕き言葉を使うのも気が引けるし、あんたも丁寧言葉をやめてくれると気が楽なんだが」

魔理沙がそう言う。じゃあ、と、シオリは彼女の名前をこう言った。

「わかった、魔理沙ちゃん」

呼ばれ慣れていなかったのだろう。驚いたような顔で、彼女は素っ頓狂な声をあげた。